

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アラビアンナイト：ファンタジーの源流を探る

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4799

エロチックナイト バートン版

好色文学としてのアラビアンナイト

アラビアンナイトには子どもたちの想像力をかきたてるような魔法物語だけではなく、色事からむ話やエピソードもたくさん入っていましたから、子ども向けと大人向けに二極化されていったのは自然な流れでした。とは言っても、ガラン写本には、インドの性典『カーマ・スートラ』やアラブの性典『匂える園』に匹敵するほどの性愛描写はありません。アラビアンナイトに好色文学としてのイメージがつきまとうのは、近世以降の増量作戦、バートンやマルドリユスらの恣意的な翻訳であったと言えるでしょう。また挿絵からうける印象も無視できません。日本で出版されたバートン版(大場正史訳、河出書房)やマルドリユス版(豊島与志雄他訳、岩波書店)にも美麗で官能的な挿絵がついています。これらの挿絵に惹かれて本を手にした方もいるのではないのでしょうか。

十九世紀になって印刷術が発達すると挿絵を入れることが容易となり、大人向けのアラビアンナイトにも数多くの挿絵がつけられるようになりました。たとえば「図書館に（最適）」と評されたレイン版の挿絵には実際の中東風俗が描かれており、シエヘラザードが中東風の衣装をまといっています。そもそもレインがアラビアンナイトの翻訳を志したのは、中東の風俗習慣を紹介するためでした。彼はアラビアンナイトを翻訳する前に、カイロの都市風俗を詳細に記録した『現代エジプト人の風俗習慣』を著しています。これは近代の中東社会を正確に記録したものとして高く評価されており、文化人類学の古典として今もその価値を失っていません。当然ながらレイン版につけられた挿絵は、官能を強調するようなものではありませんでした。



エドワード・ウィリアム・レイン (1801～76)

しかしながら、アラビアンナイトの本質は性愛文学であるという期待感の種を撒いたのは、ガランやレインだったとも言えるでしょう。彼らはともに官能的な箇所を削除したり、「ここは訳出しなかつた」と断り書きを入れたりしたからです。原典を知らない読者にしてみれば、本当においしいところはおあずけになっていると思うでしょう。

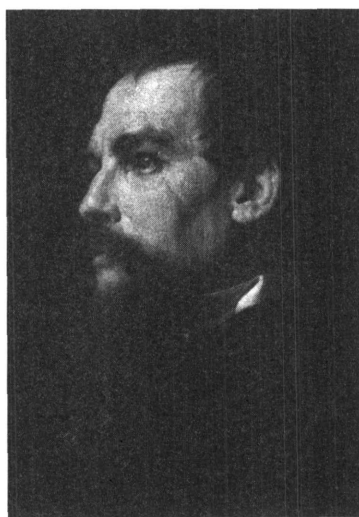
自分たちの社会で実現できない夢やあり得ない幻想を見知らぬ世界に託すのは、近代のヨーロッパに限られた現象ではありませんが、十九世紀になると、ナポレオンのエジプト遠征の影響もあっていわゆるオリエンタリズム絵画が盛んに描かれるようになりました。アングル（一七八〇〜一八六七）の『トルコ風呂』や『オダリスク』、ジェローム（一八二四〜一九〇四）の『蛇使い』などが代表的な作品ですが、そのいずれもが裸体を強調した官能的な表現で描かれています。このような時代の流れにそって、挿絵に描かれたシエヘラザードは次第に薄着になっていき、最後には全裸となりました。最初期の挿絵に登場するシエヘラザードはフランス宮廷の貴婦人風に描かれていましたが、日本語訳マルドリユス版第一巻の表紙を飾るシエヘラザードは全裸になっています。この表紙絵はファン・ドンゲンの手になるものですが、マルドリユス版のフランス語版初版には挿絵は入っていませんでした。ちなみにバートン版の英語版初版にも挿絵は入っていません。

アラビアンナイトは時代とともに好色文学としてのイメージを強めていったのですが、日本もそのプロセスに加わっていたということになるでしょう。異邦への憧れにもとづく十六、七世紀のオリエンタリズム（東洋趣味）は、植民地時代の幕開けとともにエドワード・W・サイードが定義するような他者支配のためのツールとなり、「物言わぬ他者」として一方的な視線にさらされたシエヘラザードも最終的にはすべての衣装をはぎとられ、全裸で夜話を聞かせることになってしまったのです。

リチャード・バートン——額は神、顎は悪魔

バートン版アラビアンナイトの翻訳者サー・リチャード・フランシス・バートン（一八二一〜九〇）は探検家、外交官としても活躍しました。スピークスと共にナイルの源流を探索する途中でタンガニーカ湖を発見したり、変装してメッカに巡礼したりといった大冒険をこなしただけではなく、アラビア語をはじめとする東方の諸語にも通じていました。

バートンはアラビアンナイトの翻訳以外にも数多くの著作を残しています。多作家だった彼は歴史、文学、地理などに関する（往々にして）マニアックな作品を山ほど生み出しました。一言であらわすならば、いわゆる優等生とはまさに正反対の人生を歩んだ人物だったと言えるでしょう。



サー・リチャード・フランシス・バートン
(1821~90)

バートンは父親の事情で少年時代のほとんどをヨーロッパ大陸ですごしましたが、オックスフォード大学に在学してアラビア語を学んだ経験もあります。トラブルメーカーだった彼はオックスフォード大学を放校処分になり、二十一歳のときにイギリス東インド会社の軍に入隊してインドの諸語や文化について

の知識を身につけました。当時から奇矯な人柄で知られ、サルという言葉を「学ぶ」ために多数のサルを飼ったこともありました。六十ほどのサル語を確認して単語帳を作ったのですが、残念ながらこの単語帳は火事にあつて燃えてしまったそうです。

インドでは土地の女性と同棲し、彼女をとおして現地の言葉や風俗習慣に関する知識を蓄えていきました。彼は、バートン版アラビアンナイトにつけられた膨大な注を見ればわかるように、性風俗に関して強い関心をいっていましたし、前回で紹介したように性愛描写の場面では原文にはない修飾語を意図的に付け加えています。バートンが性愛描写にこだわったのは、ヴィクトリア朝の偽善的な性倫理への反感もあつたようです。

決して原文に忠実とは言えないバートン版は、アラビアンナイトの集大成として広く読まれてきました。バートンが翻訳の底本にしたのはカルカッタ第二版ですが、彼はそれまでに知られていた物語を網羅することにこだわり、カルカッタ第二版には含まれていない話も訳出しました。バートン版アラビアンナイトは本編十巻と補遺六巻から成っており、当時、アラビアンナイトの名のもとに知られていたほぼすべての話を収録しています。本編十巻はカルカッタ第二版を、補遺六巻はヨーロッパで編集されたアラビア語刊本であるブレスラウ版などに入っている物語を翻訳したのですが、これらはすでに英語に訳されていました。カルカッタ第二版はエジプトで編集されたブラーク版をもとにしているのですが、このブラーク版はバートンよりも先にレインが訳しています。また、補遺六巻の主要な底本となつ

たプレスラウ版については、バートンよりも先にペインが訳していました。つまり、一八八五年から八八年という短期間に一気に十六巻を出版したバートンは、すぐれた先行訳を参考にすることができたわけです。なお、バートン版アラビアンナイトとして出版されたものは、もう一つあります。バートンの妻イサベルが編集した『バートン夫人版アラビアンナイト』です。破天荒な問題児だったバートンに対し、妻は敬虔なカトリック信者でした。彼女は夫を「この世の神」として崇拜していましたが、バートンの無神論的な傾向は頭痛の種だったようです。イサベル本人の言によると、彼女はバートン版アラビアンナイトを読んだことはなかったそうですが、一八八六年にはきわどい性描写を省いた『バートン夫人版アラビアンナイト』が六冊本の形で出版されています。ただしこの版はほとんど売れませんでした。バートンはバートンで、『バートン夫人版アラビアンナイト』から削除されてしまった箇所を集めて『アラビアンナイトの黒い本』を作る計画まで立てていたそうです。

イサベルは何とかして夫をカトリックに改宗させようと努力を続け、臨終の床にあった夫に秘蹟を受けさせることができました（一説には秘蹟を授けたとき、バートンはすでに死亡していたとも言われています）。トリエステで客死したバートンの遺骸をイギリスまで持ち帰ったイサベルは、夫の棺をロンドン郊外のモルトレーク墓地に葬り、遺言にしたがってペドウィンのテントを模した墓を建てました。墓地に隣接した教会に入ってみると、カトリックに改宗してひざまづくバートンを描いたステンドグラスが飾られていました。イサベルが寄進

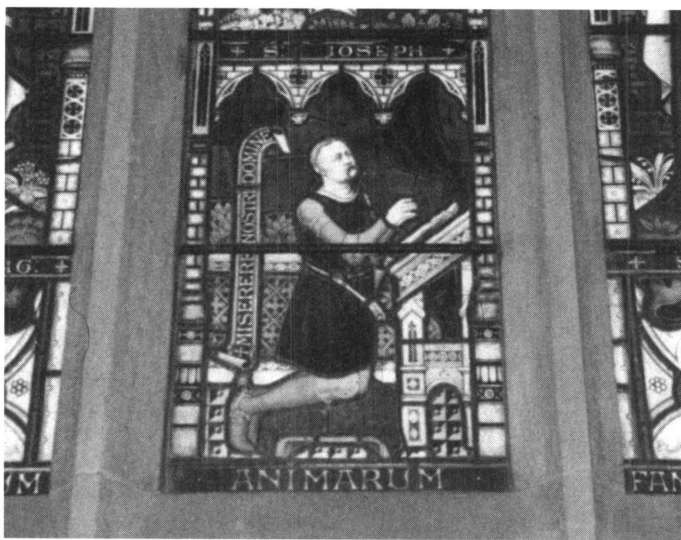
したものだそうです。ステンドグラスのバートンは、世にも情けない表情を浮かべて上方を
あおいでいました。

バートン版アラビアンナイト——ペイン版の上書き？

バートン版アラビアンナイトよりもほんの少しだけ前に出版されたペイン版は、英語によるもつともすぐれたアラビアンナイト翻訳書であるとされていますが、言葉遣いの古さや出版数の少なさもあつて現在ではほとんど読まれていません。しかしながらペイン版を闇に葬つたのは、実はバートン本人だったとも言えるのです。

バートンがアラビアンナイトを出版しようと思ひつた一番の動機は、予約販売による現金収入にあつたのだからということ、かねてから指摘されてきました。バートンは、自著の前書きですつと前からアラビアンナイトの翻訳を計画していたと述べていますが、これは本当の動機を隠すための詭弁だったのでないかとされています。バートン版は千部限定の自費出版でしたがみごとに完売し、バートン夫妻はかなりの大金を手にすることができました。なおペインは俗世的な成功にはあまり関心がなかつたらしく、アラビアンナイトの翻訳をめぐるバートンとの間にトラブルがあつたという話はないようです。

全十六巻もあるバートン版アラビアンナイトがわずか三年間で世に出たのは、ペイン版を下敷きにしたからだと言われています。実際にもバートン版とペイン版は、バートンによる



バートンの墓があるロンドンの教会のステンドグラスに描かれたバートンの姿
(著者撮影)

加筆部分（性愛にかかわる部分と膨大な注釈）を除くと非常によく似ています。同じ原典に拠っている以上、同じような訳文になるのは当然ですから、バートンは何とかしてペインとは

違う言葉を使おうとしたようです。『必携アラビアン・ナイト』の著者ロバート・アーウィンが、その一例として「第二の遊行僧の話」を挙げていますので、少しだけ両者を比較してみましよう。まずはペイン版。

わたくしは王の息子でありまして、わが父王に読み書きを教わりました。わたくしは七つの流儀にそってコーランをそらで誦し、学識ある博士らの教えにしたがって万巻の書に親しんだのでございます。星の科学や詩人の金言を学び、あらゆる知識を身につけましたので、世の人すべてに勝るほどになりました。

次はバートン版です。

わたくしは王の息子でありまして、王子たるにふさわしく育てられました。わたくしは七つの流派にしたがってコーランを詠唱し、万巻の書を読んでは博士や学者とその内容についての意見をやりとりし、星辰学や詩人のすぐれた金言を学んであらゆる学問を身につけましたので、世の人々をしのぐほどになりました。

バートン版とペイン版が酷似していることについては激論が巻き起こったこともあるのですが、どうやらバートンの分が悪いようです。しかしながら現在では、他人の訳文を下敷きにして加筆をおこなったバートン版こそが、アラビアンナイト本来の姿を忠実に伝えているという見方が強く、東洋文庫版の翻訳者である前嶋信次も悪貨が良貨を駆逐したのだろうかという旨の感想を残しました。

とは言うものの、バートン版のすべてがペイン版を下敷きにしていたわけではなく、ウォートリー・モンタギュー写本の一部はバートンしか訳していませんし、アラジンやアリババも独自に訳しています。さらにバートンは自著の序文で「先の三訳（トレンズ版、レイン版、ペイン版）を活用してたくみに集成した」と明言しています。バートン版には当時の世界で

知られていたあらゆるアラビアンナイトが含まれていました。アラビアンナイトの編集作業を川の流れと見るならば、バートン版は河口近くで最大幅に膨らんだ姿にもたとえられるでしょう。

放屁譚顛末——南方熊楠「十二支考」

バートン版の特徴は、好色箇所の意味的な加筆、中東の生活習慣に関する（時として偏った）膨大な注釈、性風俗をめぐる有名な巻末エッセイにあるといえるでしょう。その一方では、おそらくはいたずら心からこっそりと創作を紛れこませています。第四百十夜「アブー・ハサンが屁をした話」です。

ヤマンのコーカバンに暮らしていたやもめのアブー・ハサンが処女と再婚することになった。ところが、婚礼の席で思わずおならをしてしまって恥ずかしさにいたたまれなくなり、小用のふりをして宴席から抜け出すと、そのままインドに渡ってしまった。インドでは高い地位も得たが、十年後、ほとぼりもさめただろうと思つて故郷に戻ることにした。自分の正体を隠して人々の話に耳を傾けていると、ある家の中から「運勢を占つてもらうから、自分が生まれた日を教えてほしい」という娘の声が聞こえてきた。母親が答えるに「おまえが生まれたのは、アブー・ハサンがおならをした日だよ」。これを

聞いたアブ・ハサンはインドに戻ると、二度と故郷には帰らなかつた。

何らかの恥ずかしい行為が日付の記憶ツールになっている話は、二十世紀に採集されたエジプトの民話にも出てきますから、このパターンの話は昔からあつたのでしょうか。

一方、南方熊楠（一八六七～一九四一）は『十二支考』の馬の項で次のように書いています。

昔アラビヤのアブ・ハサンてふ者カウカバン市で商いし大いに富んだが、妻を喪^{うしの}うて新たに室女^{きむすめ}を娶り大いに宴を張つて多人を饗し、婦人連まず新婦に謁し次にアを喚^よぶ。新婦の房に入らんとて恭^{うやうや}しく座を起たんとし、一発高く屁を放つてけり。衆客彼慙^はじて自殺せん事を恐れ、相顧みてわざと大声で雑談し以て聞かざる真似した。しかるにア、心羞^はずる事甚^{はなは}だしく新婦の房へ入らず、厠^{かわや}に行くふりして庭に飛び下り、馬に乗つて泣きながら走り出で、インドに渡り王の近衛兵の指揮官まで昇り、面白可笑しく十年を過した。その時たちまち故郷を懐^{おも}うて死ぬべく覚えたので、王宮を脱走してアラビヤに帰り、名を變じ僧服し徒歩艱苦してカウカバン市に近づき還つた。ここを去つて久しくなるが、今も誰か己の事を記憶し居るかしらと惟^{おも}うて、市の周辺を七晝夜潜み歩いて聞き行くうち、とある小家の戸口に坐つた。家裏で小女の声して自分の年齢を問う様子。耳を聳^{そばだて}て聞きいると、母答えて汝はちやうどアブ・ハサンが屁を放つた晩に生まれたと言うを聞

きて、さてはわが放屁はこの人々が齡を紀する年号同然になりおり永劫忘らるべきにあらずと、大いに落胆して永く他国に住まり終ったという。

これはまちがいなくバートン版アブー・ハサンの話からとってきたものでしょう。南方熊楠は、日本では最初期にバートン版の情報に接した人物であると思われ、バートンの宣伝文句を真に受けたこともあって「アラビアンナイトこそは世界三大猥褻書わいせつのひとつ」だと思っていたようです。バートン版と十二支考の関係からは、「書かれたもの」としての情報に対する信頼が作られていく過程が見てとれます。

特定の作者や編集者を持たず、世々の状況にあわせて無限の編集がくりかえされてきたアラビアンナイトは、文字として書かれるたびに新たな編集に採録されていきました。バートンが作ってしまったアブー・ハサンの話はアラビア語原典には載っていないにもかかわらず、マルドリユス版には入っているのです。マルドリユス版は日本でも愛読者が多いのですが、この作品はアラビアンナイトのフランス語訳ではなくて、アラビアンナイトを題材にしたフランス文学であると言ったほうがいいでしょう。次回ではマルドリユス版について確認してみましよう。